

ブラジル文学がずいぶん身近に感じられるようになった、と言うのは少し大袈裟に聞こえるだろうか。

二〇一七年一〇月にミウトン・ハトゥン (Milton Hatoum) 『エルドラードの孤児 (*Orfãos do Eldorado*)』(武田千香訳、水声社)の刊行から始まった《ブラジル現代文学コレクション》はすでに十冊に達した。二十世紀の名作であるグラシリアノ・ハーモス (Graciliano Ramos) 『乾いた人びと (*Vidas secas*)』や、二〇一二年にジャブチ賞を受賞した日系ブラジル人作家オスカル・ナカザト (Oscar Nakasato) 『ニホンジン (*Nihonjin*)』など多様なラインナップである。また、ブラジル独立二〇〇周年を迎えた二〇二二年、クラリッセ・リスペクトル (Clarice Lispector) 『星の時 (*A hora da estrela*)』(福嶋伸洋訳、河出書房新社)が第八回日本翻訳大賞を受賞したのは記憶に新しい。ブラジル文学史を彩る作品群がこうして次々と日本語に翻訳され、ここ数年で以前にもまして「身近に感じ

られるようになった」と言うのも、あながち大仰ではないかもしれない。

本書『ブラジル文学傑作短篇集』の目的の一つは、六名の作家の手による十二篇の作品を通じて、二十世紀のブラジル（主に当時首都だったリオデジャネイロ）社会を見つめる機会を提供することにある。テーマは家族、子ども、恋愛、結婚、嫉妬、死など数多の文学が取り上げてきたものであるが、本書ではそこに人種や階級といったブラジルが抱えている問題が絡む。登場人物が白人か黒人（混血）かは各作品を味わう上で極めて重要な要素であり、人種はたいいてい階級とも関わっている点に留意しなければならない。加えて、本短篇集の一部の作品で題材となっているカーニバルやサッカーといった文化もブラジルらしさを象徴するものである。一方で、リジア・ファグンジス・テーリス（Lygia Fagundes Telles）の「蟻（As formigas）」と「肩に手が……（A mão no ombro）」に見られるような幻想小説はブラジル文学の主流をなすものではないが、ムリーロ・フビアン（Murilo Rubião）やモアシル・スクリアル（Moacir Scliar）らの作品を引き合いに出すまでもなく、確固たる存在感を放っていることは強調しておきたい。

六名のうち、アニーバル・マシャード（Aníbal Machado）のみ十九世紀末の生まれであるが、いずれも二十世紀に活躍した作家たちである。以下、掲載順に略歴と収録作品の概要を紹介する。

アニーバル・マシャードは、一八九四年にミナスジェライス州のサバラ市で生まれた。州都ベロオリゾンチで初等中等教育を受け、リオデジャネイロ市の大学へ進学するが、地元の大学へ編入して法学を修めた。その後、州立高校で世界史の教員を務めるかたわら、『ミナス日報（Diário de Minas）』